

コロナの課題
作

抜
粹
集

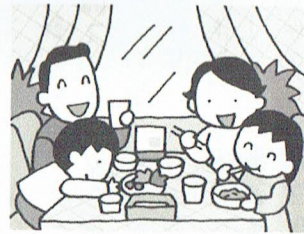
叢18号編集委員会

コロナ禍の保育士

於 久野

私の娘は保育士をしている。

3月に入って間もなく、コロナウイルス感染症拡大防止に伴う措置として、小・中・高は一斉に休校になった。世の親たちが大混乱に陥る中、保育園だけはそのまま続行された。園は親たちに文書で「出来る限り自宅待機を」の呼びかけをしても効果はなかったらしい。前にもまして仕事内容が増え忙しくなったようだ。「小さな子はコロナに感染しにくい」「園なら対策を考えてくれる」「兄弟がいる家は1人でも保育園で面倒を見てくれると助かる」などと考えたからだろうか、園内の消毒、換気、接触を避けるための整理整頓など雑用が



みるみる増えた。

彼女は今、三歳児27人を3人の職員で担当している。職員がどんなに努力しても出来るはずのないことが多々ある。例えば、マスクの着用を徹底させること。中にはキッチンと出来る児もいるが、直ぐに外す児。汚れた手で顔中を触る児。これでは付けている方がコワイ。また、いくら言い聞かせても抱きついてくる。手やおモチヤを舐める。喧嘩をする。ギャンギャンわめく。職員はつい大声で叱る。比較的マシなのが給食時だそう。ソーシャルディスタンスがとれるから席を決めておく。少しはおとなしく食べる。

なぜ騒いではいけないのか、人にくっついてはダメなのかの質問には、間髪を入れず異口同音に、

「コロナ！」と合唱するという。コロナは調子のいい合言葉なのだ。

三密を避けるなどとんでもない。接触をし

ないことなど無理、静かに叱るなどもつてのほかに……でも、職員たちは根気よく戦っている。こんな中、くたくたの毎日が約ひと月ほど続いた。

やっと、4月8日に緊急事態宣言が出て、園児が自宅待機となり、職員も休園を許されることになる。しかし、どうしても働かなければならない医療従事者の児や、スーパーなど日常生活をするうえで欠勤できない人たちの児のために、毎日10数名の児が登園してくる。もちろん、職員もそれなりの人数が交代で出勤し、コロナ対策を怠らず、緊張のままの日々を送っていた。

一応、5月21日に、緊急事態宣言が解除されるまで、週二、三日の自宅待機が出来たが、家に居ながらも、コロナ感染を避ける工夫をあれこれ考えつつ、園児のための絵や人形など、ものづくりに励んでいたようだ。

園児がコロナに感染しない、人にもさせな

い。さらに、園児に日々接触している職員が園外部の人に感染させない、親などからウイルスを貰わない。このことが生活の最優先課題になり、自らの休み期間中もずっと緊張し、自粛生活は徹底していた。

娘は私達ジジババとも決して接触しなかった。毎日届くのはお互いの安否を確認しあうスマホの大丈夫コール。学校に行けなくて、ずっと自宅待機している大学生の孫娘を加えて、生活情報などを送ってくれる。大きな物や重い物、頼んでおいた買い物、たまには、退屈しきっている孫が作った自慢のケーキなどを持って来てくれるが、家の中には入らない。五階に住む私たちの玄関のドアノブにモノを下げて、ピンポンをして一階まで降りて行く。そして一階と五階で大きな声で会話をする。しかし、二、三回でバカらしくなって、四階の踊り場で、私達は玄関ドアを開けてしゃべるようになった。

【課題作・コロナウイルス蔓延】

生きづらい世の中

美 与 呼

昨年暮れ、中国で原因不明の肺炎が流行しているというニュースを聞いた。そのころは、まだ、遠い外国の話だと思い、さして気にもとめなかったが、年が明けて間もなく、日本に初めて新型コロナウイルスにかかったと診断された人が出てきた。やがて、二月に三七〇〇人余りの乗客乗員を乗せ、横浜港に停泊した豪華客船（ダイヤモンドプリンセス号）内で感染者が見つかった。あれよ、あれよ、という間に船内での感染者は増え続け、私は船に閉じ込められて下船することも叶わぬ人々のことを案じながらも、テレビの画面に釘付けになっていた。

外出の自粛が解除になってからも、彼女たちはまだ頑なに我が家の中には入ってこなかった。こんなに意志の強い娘だったかと驚いた。

緊急事態宣言が出てから2ヶ月半あまり、いくら勧めても四階の踊り場からは一歩も近づかず、私たちとの接触は一切なかったが、どうとう恐る恐る家に足を踏み入れてくれたのは6月1日だった、

今では休日に時々昼食持参で来てくれるが、今なお、気のゆるみは解けていないし、他の職員もピリピリして保育を続けているという。それぞれの人が自分の持ち場で懸命に仕事をしているのだと思う毎日である。

一昨日、ニュースが流れた。（東京の保育園で25人？の感染者が出た。オモチャからの感染も疑われる）……と。

テレビを見る限りでは菌ごと船に密閉されているようで、なぜ、窓や、ドアを開放しないのだろうと思ったが、見守るしかない。恐怖の船室のように思えた。

そうこうするうちに、日本国内にもぼつぼつ感染者が出始めた。三月二十九日、我々には元氣そのものに見えた、コメディアン志村けんさんが、新型コロナウイルスで亡くなり、俄かにメディアを通じて、このウイルスの怖さが浸透するようになった。

感染者は日を追って増えていき、各メディアは、こぞって感染者数、重症者数、死亡者数を毎日更新して発表していき、予防が奨励された。

今年あるはずだったオリンピックも、IOCとの折衝で来年に持ち越された。果たして来年できるのか、これも疑問であるが。

感染形態は、飛沫感染で、空気感染でないのが明らかになった。手洗い、消毒、マスク

着用等、人々は家庭で出来る予防はこぞってやりだした。やがて、緊急事態宣言が発令され、パンデミック、ロックダウン、ソーシャルディスタンス、耳なじみのない言葉がテレビの画面上で飛び交う。そして、三密、という言葉が生まれた。密閉、密集、密接、を避ける。三密、という言葉聞いて、感染者が多く出た病院の画像が、気になった。クローラーをつけなければいけない真夏でもないのに、なぜ建物全体の窓を閉め切っているのか、あれを見ると病院に行くのが怖くなる。医師も看護師もみんな恐怖と闘いながら一生懸命やっているのにどうしてなのだろうか、そこが、素人の浅はかさで、解らないところである。

一旦下火になって、緊急事態宣言も解除されたが、またじわじわと、力を盛り返してきている。

三密を避けるでは、若い人は恋愛もままな

らないであろう。子供達も外で自由に遊べない。マスクをしてソーシャルディスタンスを保って、どうして楽しく遊べるだろう。また、大人は仕事をしなければ生きていけない。テレワークだけでは、世の中は回っていかないのだ。

私の娘も、子供達を相手の音楽関係の講師をしているのだが、非常に神経質になっている。自分がコロナウイルスに感染して、生徒にうつしてはいけないので、なるべく家に来ないように、と申し渡されている。

緊急事態宣言中は、仕事も休みになったようだが、解除後は、オンライン授業も一部取り入れて、徐々に仕事に復帰しているのが、娘の様子からうかがい知ることが出来る。また、感染すると、高齢者や持病のある人は、重症化しやすく死亡率も高くなるということである。そう言う事もあって、娘が私のことを心配するので、余程の用事がない限り行か

ないことにしているが、たまに行ったときは大変である。先ずピンポン、と呼び出し音を鳴らして中へ入ると、玄関に小型の椅子が置いてあり、その上に消毒液が入ったスプレーヤーが鎮座している。

「はい、お母さんちよつと待って」と言っ、消毒液をスプレーヤーで上から下までシュツ、シュツと振りかけられる。終わると、

「じゃあ、向こうを向いて」と言っ、今度は背中の方にシュツ、シュツとやられる。それが終わると

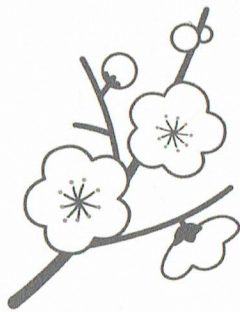
「両手を出して」と、手のひらにシュツシュツ。

その儀式が終わってやっと家に入れる。そして、うがいをする。
娘の中では私は完全な高齢者なのだ。年齢を言えば、世間的にもそうには違いない。自分では全くそんな気はしないのに、認めたくはない、嫌なことに限って世間はすぐ認めて

くれる。

娘は娘で、人も自分も感染しない、させない、という事に最善を尽くしている。

けれど、ああ、コロナのこの字も知らなかった数か月前のように、皆が自由に生きられる日が早く来てほしい。



職業の重要度

美善 真一郎

今年、令和二年は新型コロナウイルスが蔓延した。一月、二月はまだよかったが、三月には行政から営業自粛や休業要請が出され、四月には緊急事態宣言が全国に発令された。

職業により営業停止と営業支援に分かれてしまった。こんなことがあってよいのだろうか。人は皆平等であるはずだ。全ての人は生活を賭けて自分の仕事を一生懸命しているのだ。

営業停止や営業自粛をされた職業は、キャバレー・ナイトクラブ・ホストクラブ・接待をとまなう飲食店、旅館・観光業・演技場・演芸場、プロ野球・大相撲・プロゴルフ・プ

ロサッカー・オリンピック、それにスポーツ観戦全般である。

J1サッカーの長友選手が七月一日のNHKのインタビューで言っていた。コロナで分かったことは「サッカーは生きるために必要でない。サッカーは楽しむためにある」と。また、DENA球団前社長池田氏が言っていた。「プロスポーツは不要不急である」と。

私は大相撲枚方場所の入場券を買った。開催はコロナのため年末まで延期になり、さらにその後中止になってしまった。私は相撲を見て楽しむのが目的だった。延期や中止になってもなんら困ることはなかった。

芸術やエンターテインメント業界の人はいう。客が入らない。グッズが売れない。収入は一割になった。存在価値がなくなった。俳優が掃除婦をしたり、芸能人が宅配をしたりしている。営業支援が全くない。オーケストラの

楽団員が言っていた。「生きるために必要でない日本の伝統文化はコロナ時代には淘汰されるのか。私は必死で今仕事を探しています」と。またオリンピックメダリスト、フェンシングの三宅選手は、スポンサーがなくなり、

宅配のアルバイトをしていると聞く。逆に営業を支援されたり、要請されたりした職業がある。

それは、病院・薬局の医療施設、食料品生産者・卸売市場・コンビニ・スーパーマーケットなどの販売店、ホームセンター・ガソリンスタンド・衣料品店・文具店・生活必需品資販売施設、さらにバス・タクシー・電車の交通機関、物流サービス・宅配業などである。

食料品の入荷が、大相撲枚方場所のように年末まで伸びたり、中止になったりすればどうだろう。私はたちまち飢え死にしてしまう。

これで分かるのは、スポーツや演芸に関わる職業よりも、居・食・住に関わる職業の方が

遙かに重要な職業であるといえる。

オリンピック出場予定だったラグビー七人制日本代表の福岡選手は、ラグビーを止めてドクターを目指すテレビで言うのを見た。ラグビーをだめだというそんな考えは彼には全く無かったと思う。しかし、コロナ蔓延の世の中となつてはラグビー選手を止めてドクターを目指す方が遙かに賢明な判断であったと思う。

令和二年八月二十日現在、専門家が言っている。全人類が、コロナ感染免疫を持つには時間が必要だ。コロナを収束するにはあと四年はかかるという。

これからの職業選びは、私たちの暮らしにとって、何が重要な職業であるのか、よく考えて選ばなくては生きていけないと思う。

私と孫は濃厚接触者

白雲

コロナ禍で、学校が休校になり、三、四、五月の三ヵ月間、我が家は私設の学童保育所になった。指導員は七十二歳の爺と七十歳の婆だ。

二月末に安倍首相が、春休みを早める感じの休校宣言をだした。小学三年生のあり君と、妹の一年生のふく子ちゃんが、週に三、四日、我が家へやってきた。

息子の健二は臨床検査技師、嫁は看護師で、病院で働いている。早く始まった春休みに、孫達は楽しそうだ。畑で蝶々を追いかけ、自由気ままに遊び、申し訳程度に、親が買い与えたドリルをしていた。学校からは外出を控

て行った。

風評への不安も大きかった。勤務先がクラスタリーになったことは、大きく報道された。私は近所の視線さえ気にかかった。そんな中、健二が明るい表情で話してくれたことがある。叔母から陣中見舞いと称してお菓子が送られてきたことや、ご近所の方が、手持ちのマスクを使って下さいと、届けてくれたことだ。

高齢者が感染すると重症化する確率が高い。私は、家族間で感染しても仕方がないと聞き直り、孫達を預かった。

こんな事もあった。畑で採れたえんどう豆を近所の友人に届けるつもりで、あり君とふく子ちゃんを連れて散歩にでた。都会だが過疎化地区の町内は普段から人影は少ない。さらにコロナの自粛が守られ、静まり返っている。友人と玄関先で言葉をかわす。孫達のはしゃぐ声が路地に響く。すると近所の人々がふらりと出てきて、声の主を確かめているよう

えるようにいわれているのか、近くの公園では誰も遊んでいない。満開の桜を見ながら、私は得体の知れないコロナに、内心おびえていた。

四月になり、春休みが終わっても新学期は始まらなかった。学童保育は始められていたが、医療従事者の子供は、感染の確率が高いとの風評も耳にはいる。親も学童を利用することをためらった。

四月下旬、健二の勤務する病院でクラスタリーが発生した。十年前、財政難を理由に市民病院が閉鎖された。その後は、地域医療の中核を担ってきた病院だ。非常時の備えに対し、お金をかけてこなかった医療行政のぼろが、あちこちの医療現場から出てきた。息子は自分が感染し、さらに家族や親に拡大させたらと、一番苦しかったと思う。出勤前に我が家に子供達を送ってきて、家に入らず戦場に赴く兵士のような固い表情で、職場に出かけ

なそぶりだ。私は自粛警察の眼を感じ、公園で遊びたがる孫達をせき立て、家に連れて帰った。

孫の世話も長期間に及ぶと、遊ばせてばかりではいられない。学校から届けられた宿題も、誰かが見てやらないとやろうとはしない。学校の先生も急きよ家庭学習の教材を揃えるのは大変だったと思うが、親に代行を振られてもなかなか難しい。

机の前に座らせて、どれだけ勉強するつもりかと尋ねると、三十分と言いながら、あくびが始まる。しばらくすると、アイスが食べたいと言ひ出す。私は声をはりあげ、なだめすかす。国語の音読を何回もやらせ、評価表にチェックを入れていると、アナウンサーになるわけではなし、普通に読めればそれでよしと、肩の力をぬいた。

公園に行くと、近所の子ども同士がサッカーボールを蹴って遊んでいるのを、あり君は

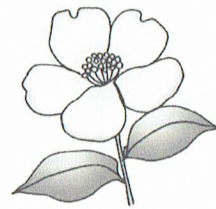
うらやましそうに見ている。友達と遊びたいのだから、家の中ではゲームやユーチューブに夢中になっているが、本心から楽しんでるわけではなさそう。

六月に入り、学校が再開された。コロナと共存して暮らす。三密を避ける。ふく子ちゃん、三密とはどういう事かは、きつちりと答えられるが、友達と鬼ごっこをしたり、ままごとをしたりとべったりくっついて楽しくやっているようだ。放課後は学童にも通い出した。風評も気にしだすと、不安ばかりで苦しくなる。

思わぬ出来事で、孫と濃厚に接する時間を過ごした。今の子供たちが受けている学校教育を身近に感じた。新学期のスタートを九月にする、教育に費やす予算は世界的にみても少ない、教育のICT化の遅れなどを、様々な専門家がメディアで自説を述べる。コロナで浮き上がった問題だが、公教育のあり方に

ついては、じっくりと議論されるべきだ。来春、一年生になる孫は何月に小学生になるのだろうかと考えていると、訳が分からなくなる。

医療行政については、さらに実感が強い。SARSに振り回された看護師時代の事を思い出す。比較にならない大惨事のコロナ禍だが、医療従事者の苦難は、我が身に置き換わり苦しくなる。医療を支えるものは科学と政治だ。世界中の人々が、コロナとの闘いに苦心する現実には、胸が痛む。



【課題作・コロナウイルス蔓延】

コロナ禍の散歩

綾 枚

昨年十二月に中国の武漢で発生したといわれる新型コロナウイルスは、世界中に広がった。日本も例外ではなく、四月には非常事態宣言が出された。それ以来、外出は散歩と畑に行く時だけ、という単調な生活が続いた。

ただ、散歩の光景は大きく変わった。土手沿いの道は人通りが多くなり、ほとんどの人がマスクをしている。誰か見分けにくい煩わしさはあるが、最近では手作りマスクが増え、マスク美人が目立つ。マスクには感染防止以外に、おしゃれ効果もある。

もう一つ、人懐っこい人が増えた。数か月前から、散歩中飲み終えたコーヒートの容器を

公園のゴミ箱に投げ入れるのが習慣になっていく。三メートル離れたところから投げ入れ、十回やって入らなければ諦める。

十日前、十回目でようやく入って、思わずガッツポーズをすると、後ろから「良かったわね」という声が聞こえた。振り向くと、噴水を隔てた後方のベンチに初老の女性が座っていた。彼女には、軽く会釈してその場を去った。

そして一週間前、ゴミ箱の前に立つと、横のベンチに初老の男性が二人で談笑していた。十回やっても入らないので諦めて去ろうとした時、

「もうやめるんか。どうせ暇なんやろ？」と横のベンチの一人が言った。

「これ、なかなか難しいんです。ゴミ箱の入れ口は二十センチ四方しか空いていないし、風の向きと強さを読まなアカンのですわ」と言う。

「うん。その容器軽いからなあ」

と理解を示してくれた。これに気を良くして、例外的にもう一度やってみると、一回目で入った。すると、拍手しながら

「うまく読み切ったなあ。うまい、うまい」

とほめてくれた。バカにされている気がしないでもないが、悪い気はしなかった。

そして今日、ゴミ箱の前に立った時、十メートルぐらい離れた所に、男子小学生が五人で遊んでいた。四回目を投げようとした時、話し声がピタッと止まった。チラッと目をやると、全員こちらを見ており、緊張が増した。

六回目でようやく入り、ガッツポーズすると、

「イエーイ」

という大きな歓声が聞こえてきた。それに応えるべく、子供たちの方を向き両手を上げると

「イエーイ、イエーイ、イエーイ」と更に大きな歓声が上がった。

なぜ、こんなにも盛り上がるのか。日常が遮断され、みんながストレスが溜まっているとか言われているが、そうとも思えない人もいる。些細なことでも盛り上がったたり、喋りかけてきたりするのは、自粛生活のため時間に余裕ができ、おかげで心にゆとりが出来たからと言えまいか。まもなく、非常事態宣言が解除されようとしている。そうになると、空容器投げは再び見向きもされなくなる、かもしれない。日常が戻っても、心のゆとりは失わな



【課題作・コロナウイルス蔓延】

ステイホーム…気づきと再発見

きょうこ

三月末で完全退職し、これから先、何をしようかとウキウキしていた矢先の四月七日、新型コロナウイルス蔓延による、緊急事態宣言が発出された。毎日報道される感染者の数に恐れながら、夫と二人、不要不急の外出はせず、ひたすら家に引き込もっていた。お稽古事も行事もなくなり、時間はたつぷりある。結婚して四十二年になるが、これだけ長い時間を夫と過ごしたことはなかった。とりあえず、日頃気になっていた家の中のあちらこちらを片付けることにした。コロナ関連で世の中明るい話題が少ないけれど、今回家の片づけをしたことで、私の中では三つの良い気づ

きや、再発見などがあつた。

一つ目は、夫が綺麗好きで思い付きの良い人だったことに、気が付いたことだ。掃除や模様替え等は、私の得意な領域だと勝手に思い込んでいたが、そうでもなかった。今回の模様替え等の夫の提案に、最初はケチをつけた私だったが、やってみるとすべてのことがうまく収まり脱帽した。パソコン机を居間から私の部屋に移動すること、和室に置いていたタンスを、仏間のクローゼットに入れ込むこと、仏壇の横の隙間に収納棚を作ること、和室の押し入れに簡単な棚を作ること等々。仏壇の横の隙間家具は一から木材を買い込んできて、足りない大工道具も買い足して、すべて手作りの傑作が完成した。押し入れの棚は廃材を利用して作ったものだが、とても収納しやすくなった。夫も自分で綺麗にしているといろいろと気になるらしく、私への注文も多くなってきた。ちよつと困るが、夫をう

んと見直すことができた。

二つ目は、昔の自分を再発見でき、懐かしい母や姉に会えたことだ。サッサと物が捨てられない私は、押し入れや書棚に昔の物をしまい込んでいる。なくても困らない物ばかりだし、なくなれば存在したことすら忘れてしまっただろう。子供会、PTA、職場関連等の書類は、最後にもう一度サラッと目を通し、「その時その時よく頑張ったなあ」と思いながら、ほとんどの物を処分していった。

手が止まったのは、私の小学五年生・中学・高校の時の作文や、大阪に就職して結婚するまでの間に届いていた手紙等が出てきた時だ。小学五年生の作文の中には、五年前に亡くなった姉と「しょっちゅう口喧嘩をしていて、ひどいときには取っ組み合いになることもあった」と書いてあった。姉とは高校生の頃に、冷たい戦争をしていたような記憶があるものの、小学生の頃に、そんなにけんかばかりし

ていたなんて、すっかり忘れていた。なんだかとても懐かしかった。作文は捨てられない。

母からの手紙は、私が高校卒業後、大阪に就職した頃に何通か来ていた。一度は読んでいたと思うが、この手紙のことも、すっかり忘れていた。娘が一人慣れない大阪で生活し、母親としてはさぞかし心配だったことだろう。忙しい一日の終わりに、疲れて早く休みたいだろうに、家族が寝静まってから書いてくれた、ありがたい手紙だ。この時の母の年齢をどうに超えた私が、母の手紙を読み返して、今だから気づくこともたくさんある。改めて母に感謝した。手紙はいいものだ。やはりこれも捨てられない。

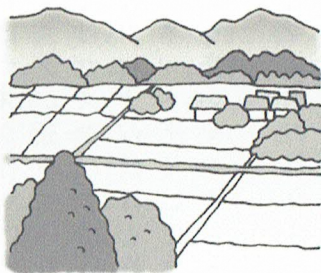
三つ目は、押入れの天袋の奥にしまいでいて一度も読んでいなかった、名著復刻日本児童文学館第一集全三十二巻が出てきたことだ。就職して間がない頃に、月賦で購入したのだろう。その当時の七万六千円は、私の

初任給の二倍ほどだ。すごいお宝が出てきた。宮澤賢治の風の又三郎を始め、聞いたことのある題名の本がびっしり。復刻版なので、装丁が立派で懐かしく感じられる。飾り物として置いていてもいいが、時間もあるのでこれからゆっくり読んでいこうと思う。昔の仮名遣いで少し読みにくいのが、楽しみが増えた。

緊急事態宣言が解除されてからは、再開したフラメンコ教室等に行くため、何度か電車に乗った。ほとんどの人がマスクを着けていることと、会話がないうことを除けば生活は通常に戻りつつある。六月十一日現在の大阪府内の感染者数は延べ千八百十二人、死亡者数は八十五人、感染者ゼロは三日連続となっている。このまま感染が収まってくれれば嬉しい。新型コロナウイルス蔓延で、ほとんどの行事（卒業式・入学式・入社式・オリンピック等）が中止や延期に追いやられた二千二十年。高校野球も中止になったが、選抜三十二

校が八月に六日間、甲子園で交流試合が出来ることになったそうだ。感染防止対策を徹底して、思い切り試合を楽しんでほしい。

他府県移動が出来ず、今年に入って一度も田舎に帰れていない。故郷の新見では今頃、コロナを知らない蛍たちが、飛び交っているだろうか。



【課題作・コロナウイルス蔓延】
マスクの話

や す こ

娘の真希がマスクを作って欲しいとメールを送ってきた。まだ緊急事態宣言が出されてはいない3月末のことだ。

私はマスクが嫌いだ。呼吸がしにくくなるし、夏場は汗をかくので不快だ。眼鏡を掛けていると曇ってくる。私は裁縫も嫌いだ。布は紙とは違い、縦や横に伸び縮みして変形し、思いどおりにはならないからだ。

真希には「私は裁縫はしません。裁縫が得意な私の姉に頼みましょう」と返した。数日後に姉から6枚の手作りマスクが送られてきた。1枚を私の手元におき、5枚を真希に渡した。

4月1日、首相がアベノマスク配布を表明。

このコンピュータミシンは真希の誕生日にプレゼントしたものだ。使うのは何年ぶりだろう。使い方も忘れてしまっていた。アレ？アレ？と言いながらも少しづつ思い出してくる。やつと縫いはじめる。

第1作はやや小さいマスクとなった。マスクの縫い代を多く取りすぎた。早速そのマスクを着用して夕方の散歩に行く。不織布マスクよりは呼吸がしやすい。しかし、暑い。マスクに覆われた部分は汗、びっしょり。やっぱりはずした方が楽だ。帰宅してから第2作にかかると。今度は大きすぎた。第3作でちょうどいいサイズになった。

実は、洋裁のプロであった姉が作ったマスクを参考にしようと思っていたが、中心が曲線の縫い目で、とても私の技術では縫えそうもない。そこで、まずは、直線の縫い目のマスクを作ることにしたのだ。このマスクは中央がとんがっている。これを少なくともと

緊急事態宣言は7日に大阪、16日には全国に拡大された。

5月になった今、私はマスク作りに精を出している。手持ちのマスクが底をついたからだ。ドラッグストアではマスクは手にはいらない。不織布マスクはコロナ以前は1枚、5〜6円だったものが、ネット上では1枚100円以上もする。そんな高いマスクを買ってはられない。

5月3日、ネットでマスクの作り方を検索した。いろいろ出ていたが、直線縫いでできる立体型にした。型紙を印刷しておく。マスクの表布は家にあるものを探した。裏布は未使用のガーゼのハンカチを使うことにした。とりあえずそれらの布を洗濯する。

5月4日、緊急事態宣言が5月末まで延長された。マスクは自分、生活必需品となりそうだ。洗濯した布にアイロンをかける。型紙を置いて布を裁断する。ミシンを取り出した。

型紙を修正した。

5月5日、とんがりを少なくしたものができた。ちょうどいい感じだ。ミシンの調子が急に悪くなった。上糸がなくなっていた。幸い、買い置きがあったので、それを使用した。夕方の散歩の時、スーパーズミヤをのぞいたら、ミシン糸の白は売り切れだった。マスク用の布やゴム紐も、もちろん品切れだ。皆、マスク作りに精を出しているのだろう。

夜、縫いあがったマスクを写真で撮影して、子どもたちに、マスクを作りますよとラインした。真希は、私の姉に作ってもらった5枚のマスクがあるから、間に合ってますと返してきた。

5月6日、長男哲也から、白色の大きいマスクが欲しいと注文がきた。マスク屋さん開業だ。2枚作った。もうひとつ、直線のブリーツが入った別のデザインのも作る。縫い方は簡単だったが、布がたくさん必要なこと、

着用したら、ダサイことが分かった。

5月7日、残りの2枚を仕上げた。夏用にと表布を2枚ではなく、1枚にした。するとミシンの調子が悪くなり、何度もほどこいた。

5月8日、ようやくマスク5枚を哲也に送った。やれやれ。

その後、調子に乗った私はマスクを作り続けた。哲也が高校時代に作ったエプロンの残り布は茶色なので、着用したら暗い印象になる。お仕立て用ワイシャツの残り布は薄い水色で、生地も薄くシャキツとしているので夏向きのマスクにちょうど良い。濃い灰色のマスクはカッコイイが、私は濃い色のサンングラスをかけるので、マスクも同じような色になるとチョット怖い印象になる。薄い黄色の花柄レースは縫いにくいのが、夏向きで軽やかだ。エプロンの残り布は厚みもあり、私のお気に入り。5月13日、次男将太が夕食を食べに来た。

【課題作・コロナウイルス蔓延】

新型コロナウイルスによる自粛

バーバまみ

令和二年、年が明けると、新型コロナウイルス関連のニュースで世界中が、騒がしくなってきた。感染力の強さや、感染による死者の多さには驚かされた。

初めは、遠い所の話のように思っていたが、政府の緊急事態宣言が発令され、マスクの報道や、知人からの医療体制崩壊警戒メールを見て、大変な事体と感じた。

学校は、三月から休校、四月始業も延期、行楽日和の五月も、ステイホーム。岡山県で暮らす母が畑でおれ腰を打撲し、入院したが面会謝絶で家族でさえも会えないという状況。医療崩壊を避けるためだ。

ので、作ったマスクを3枚持ち帰らせた。

5月15日、アベノマスクが届いた。とても小さくてダサイ。使おうとは到底思えない。このマスクで国民が安心するなんて……。

5月22日、大阪府の緊急事態宣言は解除された。

5月25日、格安スーパー、サンデイで不織布マスクが1枚30円チョットで売られていた。

マスク着用だけでなく、あつと言う間に世界中の人々の生活を変えさせたコロナウイルスだ。ワクチンや治療薬が開発されて、マスクなしに外出できる日はいつになるのか。



さて、家に居て片付けのチャンス。普段できない断捨離をしようと腰をあげた。紙類、衣類、押入れや物置などを片付けた。まだ思い切れず、まとめて押入れに片付けてしまったものもある。

近所の人も同じ事をしたようで粗大ゴミが各家の前に積まれていたのをよく見かけた。

仕事も休みになり、バタバタとしがちなのは、ゆったりできのんびりとした。しかし、仕事を失い生活が大変な方々のことを思うと胸が痛む。

運動不足解消のために、近くの畑や田んぼのあぜ道を散歩した。マスクをしていると、誰だか気づきにくいのが、知り合いに会ったら、「こんにちは」と、会釈をしてすぐに手を振り再び歩いた。おしゃべりしたいと思いつつ、しかたがないとあきらめ帰宅した。電話やメールをして寂しさを解消した。ラインでは、面白い動画を送ってくれた友がいて、クスッ

と笑いながら他の友に拡散し、笑いの免疫力をつけた。こんな交流もなかなかいいなと思っただ。

テレビを見る時間が増え、録画をして、「仁」の再放送を観て感動した。又、過去に流行した天然痘、ペスト、スペイン風邪、などの思考を促す番組も見て、これからの事も考えさせられた。

コロナで風評被害にあった高知県のある一家は、家の壁に落書きをされ転居せざるを得ない状況に追い込まれた。伝染病は、気をつけていても誰に罹るかわからない。辛い時こそ励ましあい支えあって生活をしたものだ。「早く元気になろうね！」の気持ちを大切にしたい。予防は必要だが、風評は起こさないようにとつくづく感じた。

亡くなった人の旅立ちの見送りや、面会ができない状況があったが、優しく思いやりのある看護師さんがオンラインで家族を会わせ

【課題作・コロナウイルス蔓延】

わが日常生活への影響

歩人

最近の知人のブログに、以下のような記事を見かけた。

「引退した身には、テレワークも最近よく耳にするオンライン飲み会も関係なく、新型コロナウイルスで生活が大きく変わったということは無い。しいて最近変わったことを挙げれば、①遠くへ出かけなくなったこと、②バイクをやめ近場は電チャリで移動するようになったこと、③テレビで映画をよく観るようになったこと」。

同じく引退した身の私には、まったく同感。②は私には無関係であるが、①はそのままで、③は「映画」を「読書」に置き換えれば自分

る工夫をされた。音楽動画での励まし運動など前向き発想は素晴らしい。

六月に自粛がなくなり、大変だったのは昼ごはんの仕度だったなと振り返る。

田舎の母にも会いに行けた。

これから、地震や台風などの天災があったり、新型コロナウイルスの二波、三波と、油断は出来ないが、日々安全で前向きな生活ができるようにと願う。



にそっくり当てはまる。

医療の第一線で活躍する人たち、自粛の影響で収入減に直結する観光業や飲食店等の関係者、休むことのできない一般のサラリーマン、休校を体験した生徒たちなどに比べれば、彼の言う通り「生活が大きく変わったことはない」のである。

そうは言うものの、今回のコロナ騒ぎは引退した身の日常生活にもいくらかの影響をもたらした。

三月に予定していた妻とのブータン旅行、高校時代の友人五人で毎年三月にやる食事会、高松にいる息子夫婦や孫たち、隣町に住む娘夫婦の来訪も無くなった。連休を利用しての娘夫婦との秘境温泉を訪ねるドライブ、月に一回作品を持ち寄ってお互いに講評しあうエッセーサークルの集まり、山を登る会や地元の高寿会の例会などはすべて中止になった。これらの結果として、電車やバスを利用して

の外出がなくなった。

中止ではないけれど、内容を変更したこともある。五月の連休に予定していた母の七回忌は、兄弟や家族が集まってにぎやかな食事を予定していたが、食事は中止、お寺での法要を私たち夫婦だけで済ませた。自治会や長寿会の総会は、集会をやめて書面による決議に変更になった。要は人が集まる機会が減ったのである。

このように、新型コロナウイルスの影響で中止になった行事や、内容の変更を余儀なくさせられたものもあるが、そのこと自体にはあまり痛痒を感じていない。

しかし心の問題は別である。マスク着用、うがい、手洗い、不要不急の外出自粛といった日常生活への制限というか押し付けがうっとうしい。このような内容のアナウンスが近くの小学校のスピーカーから朝、昼、夕方に放送される。NHKのラジオも同じことを繰

り返している。全く余計なおせっかいである。

畑仕事や山歩きではマスクは要らないし、わが家から一番近いスーパは隣の京田辺市にあるので、あえて府県境を越えて出かける。妻からは特にマスク着用をうるさく言われるようになった。従来は買い物物の運転手役で、スーパに行けばカートを押して買い物に付き合っていたが、マスクが嫌で車で待機することにした。

高齢者は感染すると重症になりやすいと聞けば恐怖心が湧く。他人から言われなくても自分で気を付ける。他人から強制されることは嫌な性分なのである。

コロナ騒ぎの中で一番いやだと思ったのは自粛警察という行為である。感染した人を悪者あつかいしてツイッターで誹謗する、公園で遊ぶ子供を見かけて警察に通報するなど、世の中にはいやな連中が多い。

五月には非常事態宣言が解除され、六月に

【課題作・コロナウイルス蔓延】

コロナ禍におけるそれぞれの立場

森野 不久老

コロナが猛威をふるうにおよんで、立場の違いが鮮明になったように思う。

ひとつにはそれぞれ立場というものがある。家庭のなかでの立場、職場における立場、それぞれの国家としての立場。この立場の違いは平時時、それほど目立つことなく見過ごされているが、災難が降りかかってくると露わになるようだ。

私のように高齢の身では、コロナの感染から逃れることが第一である。「ステイホーム」3密を避けて家でじっとしていなさい。

小心者の私は小池百合子おばさんの言うことに素直に従っていた。

は府県を越えての移動制限もなくなった。一昨日の日曜日には電車で宝塚まで出かけて、三か月ぶりに再開した山を登る会の例会に参加した。少しだけ元に戻ったことを実感できたが、先のことはまだまだ霧の中である。

母の命日にやってきた娘は仏前で、「おばあちゃん、いま世の中はコロナというもんが流行ってエライ騒ぎになってんねんで」と報告していた。来年の命日にはどんな報告をするのだろう。



それが自分自身を守り、他人に迷惑をかけることにつながる。

年金暮らしの身では、別に取り立てて困ったとは思わなかった。

しかし、日銭を廻して生計を立てている小さな飲食店は死活問題である。「ステイホーム」なんて言葉は死ぬと言われるに等しい。と個人店の経営者が心底辛そうに語っていた。少しばかりの間、我慢すればいいだけののと。と軽く考えていた私はその立場の違いの大きさに気づき、自分の浅はかさを恥じた。

近くの外食店は軒並みに閉店し、閉店の期限はコロナの関係で不明とした張り紙が閉ざされた扉に貼ってあった。その後も飲食店の閉店時間を早めるように都道府県は競って通達をだした。もちろん家賃の補填他、それなりの補助金も出るようだが、焼け石に水だと、当事者からは厳しい指摘ばかりだった。

感染が長引くにつれ、コロナの予防処置が

偉方) 国内の生産が全面ストップして海外の流通もストップなんて考えるだけで気が滅入るに達しない。

外国の場合はより顕著でブラジルの大統領は、新型コロナウイルスは風邪だと国民の前で力説している。感染対策よりも経済が大事であるとの為政者としての立場を表明してはばからない。死者が増加しても意に介さず、本人もマスクなどを拒否している。それでも支持率が上昇しているらしい。

スウェーデンではある程度、成り行き任せにしたらしい。つまり慌てて、ロックダウンするとか、自粛するとかをせずにじっと様子を見たということのようだ。高齢者および基礎的な疾患を有する人は免疫力が弱いので死に至る。それは仕方のないことではないか。医療に過度の負担を避け、経済もあまり支障をきたすのは避けるべき、というのが為政者の考えで、国民も当初は支持していたようだ。

第一で医療崩壊を防ぐべし、という意見と、経済が回らなければ生活できない人が続出して自殺者が急増すればコロナどころではない。という意見が対立した。これはコロナが早期に収束するのか、それとも感染が拡大するのの見通しによるだろう。素人のわたしでもわかるが、ウイルスの専門家であっても、ある程度収束に向かうという人と、2次感染はより酷い結果を招くという人とに別れ、テレビの視聴者は混乱するばかりである。

つまりのところ専門家でもわからないことはあるということではないか？ それにこれも立場の違いによる意見といえるのではないだろうか。医療従事者であれば経済うんぬん、なんて生ぬるいことではなく本当に2週間ぐらいは全国民がステイホームしてくればと思っっているようだ。医師や看護師が一番感染の確率が高いわけですから当然でしょう。

一方で為政者は(政府および都道府県のお

しかし、人口比率に対して死者の割合が多く、後に国内でも国の対策に批判的な意見がでてきた。(これらは拙い情報を私なりに理解してのことで誤解があるかも知れない。)

詰まる所、それぞれの国には、それなりの事情があるということ。一概に何が正しいと決めつけることは出来ない。相手の立場を充分理解して議論することが大事だな、と思う。思うだけでも大変で私には手に負えないが。

5月の25日に緊急事態宣言が解除された。少しばかり安心した。さて、日本の、いやいや大阪の状況はどうであろうか？ 私は天神橋商店街に視察に出かけることにした。テレビで報じられている世間の本当のところを確かめてみたかった。私が住まいする京田辺市は片田舎で大きな変化は感じられない。

視察なんて、偉そうな物言いをしたが、単に野次馬根性で退屈しのぎにでもなれば、と思いついたただけだ。

5月27日、昼過ぎにJR東西線大阪天満
駅に降り立った。天神橋商店街は日本一長い
商店街で知られ、1丁目から7丁目まで2・
6kmと本当に長い。子供の頃から親しんでき
た商店街だが、訪れるのは久しぶりだ。

シャッターで閉ざされた店が結構多い。も
う少し賑わいが戻っていると思ったが活気が
ない。食べ物屋は店の前に弁当や総菜を並べ
て店員がぼんやりと所在なに佇んでいる。と
いった光景があらこちらでみられる。ここ
らの思い込みかもしれないが目が虚ろである。
本来ならば店の中で接客しているはずなのに。
JR天満駅を過ぎると様相が一変した。結
構人が多くて賑わっている。昼間なのに居酒
屋は3密状態で昼飯にちよつと一杯という感
じである。自肅には飽きた、と憂き晴らして
いるようにも見える。

店の人は3密なんてなんぼのものじゃ？
稼げるときに稼いでおこうと、威勢がいい。

これは同じ業種でも大手チェーン店は違う。
店の前に消毒用のアルコール容器が用意して
あり、店の中もソーシャルディスタンスで席
に間隔を取っており、それなりの対策が見て
取れる。

風評被害が致命傷になりかねない。で、客
もまばらで閑散としている。

マスクもたくさん出回っていた。普段は閑
係のない店までが、ワゴンに色とりどりのマ
スクを並べている。流通経路がどういう仕組
みなのか不思議な感じがした。

パチンコ店も覗いてみた。天満駅周辺には
規模の小さなパチンコ店が多い。3密を避け
るため入り口のドアは開いたまま、とても静
かで落ち着いた雰囲気である。いつもは騒然
とした音楽も抑制されていて実に静かで、客
は整然と行儀よくパチンコ台に向かい私語も
無い。禅宗の僧が座禅をしているような雰囲
気である。ついこの前、世間を騒がしたこと

が嘘のよう。

一つ、一つの店と、そこで働く人を丁寧に
観察して歩いたら、思いのほか疲れて足が重
い。天六からJRの天満駅に戻り、京橋経由
で帰ることにした。急に空腹を感じたので京
橋で途中下車して居酒屋で夕食を摂り、帰宅
した。

家に戻ると家内から
「このコロナ、コロナで騒がしいときに、連
絡もなく何処をうろついていたの？」

と、きつい言葉が浴びせられた。めったに
飲まないお酒のせいで顔が赤いこともあって、
家内は腹を立てたのであろう。

そういえば、ちよつと友達に会ってくる、
とだけ言って出かけたことに気が付いた。
（視察じゃ、視察……）そんなこと言えるわ
けがない。

「友達に誘われてえ……、それでえ……」
我が家における私の立場はかくも弱い。

同人名簿